2006年度　明治大学人文科学研究所「生命文化公開講座　京都」

—総合テーマ—

『生と死をめぐる伝承—念(おも)いの世界』

日　　時　　２００６年１２月２日（土）午後２時～５時
場　　所　　相国寺承天閣美術館講堂
聴 講 料　　無料（事前申し込み不要）
主　　催　　明治大学人文科学研究所
問合せ先　　明治大学人文科学研究所
　　TEL　03-3296-4135

ごあいさつ

明治大学人文科学研究所
公開文化講座開催委員会委員長　栗　原　　彬

「私たちはどこから来たのか？私たちは何者であるのか？私たちはどこへ行くのか？」

これは近代文明を批判してタヒチに住んだフランスの画家ポール・ゴーギャンの発した根元的な問いです。この問いは、地球化と市場化、格差社会化と軍事化の波に翻弄されて、未来の展望もなく、不安の海にあてどもなく漂い出した私たちこそがもつべき問いではないでしょうか。

刹那的な刺激の中に、生きていることの手応えもなく、日々を忙しく走り続けながら、私たちは、一方で身辺から遠い地まで、いじめと虐待、悪と悲惨に心痛めつつ、他方では攻撃性と暴力性を孕むナショナリズムの奔流に、我知らず呑み込まれていきます。しかし同時に、社会のさまざまな場所、各地で、見失われた「人間」を探し求め、「共生」を志向する社会のかたちを模索し、血の通った文化を創造しようとするひそやかな動きも始まっています。

明治大学人文科学研究所は、各地の志ある方々と響き合い、連携しつつ、その地の固有の文化創造に学び、研究の現場に吸収すると同時に、その研究成果を当地に開放して批判を仰ぐという、大学と各地との知の相互交流を試みてきましたが、その一環として、毎年各地で公開文化講座を開催しております。

今回の公開文化講座は、相国寺の御厚意により、場所を京都に設定させて頂きました。

京都は、日本の一地方ではなく、日本こそ京都の一地方であるといっても過言ではありません。日本の今昔の精神文化、すなわち、文芸、芸能、伝承、美術、宗教、哲学、建築、庭園、風景等の悉くが、京都と深い関りをもっています。例えば、能は京都発の世界的な芸術と言えますが、すぐれた能舞台はなぜかくも現代人を震憾させるのでしょうか。それは、能が現代人の見失った「生と死」の深淵を構造化しており、その深みに由来する重層的な「念(おも)いの世界」を燠火のように熱く内包しているからではないでしょうか。

私たちは、時空を超えた京都に軸足を置いて、有縁の方々と力を合わせて「生と死をめぐる伝承—念(おも)いの世界」という主題と取り組むことを通して、果てしもなく崩壊と頽廃に向うかに見えるグローバル市場化時代の人間と社会の流れに一矢むくい、平板化と卑小化に傾く文化の大勢に歯止めをかけたいと念じています。

参加される方々には、公開文化講座をいわば能舞台のささやかな「橋がかり」にして頂いて、それぞれの念(おも)いを京都・相国寺という深い場所に一度運び、そこで練り直した念いを自らの生の現場に持ち帰って頂きたい、かつそのことから私たちに豊かな学びと探究のフィードバックが頂ける講座でありたい、と切に願っております。

禅僧の遺偈

大本山相国寺管長　有馬(ありま)頼底(らいてい)

略　　歴：

昭和８年（１９３３年）東京生まれ。８歳で大分県日田市にて得度。２２歳で京都相国寺に入門し、その後、相国寺にて禅僧として修行を重ねる。古代から近代に至るまでの墨蹟、茶道具、美術工芸品などに造詣が深く、禅宗歴史美術を通じて広く一般に布教活動を行っている。

号　大龍窟

臨済宗相国寺派七代管長、鹿苑寺金閣住職、慈照寺銀閣住職、京都仏教会理事長、日本文化芸術財団理事

主要著書：

『禅の心茶の心』（共著）（朝日新聞社・２００６年）、『禅僧が往く』（日本経済新聞社・２００４年）、『禅と茶の湯』（春秋社・１９９９年）、『禅僧の生涯　その生き方に学ぶ』（春秋社・１９９７年）等。

室町人の”死”と”生”—出産と死をめぐって—

明治大学商学部専任講師　清水克行（しみずかつゆき）

Ⅰ　室町時代というと、能・狂言や生け花・茶道など、日本の伝統文化が花開いた雅びな時代として知られています。しかし、一方でこの時代は、飢饉や疫病、闘乱などで人々がいとも簡単に命を落としてしまう、”死”が身近な時代でした。この時代の数々の華麗な文化財や人間に対する深い省察も、実はそうした壮絶な時代状況を背景にして生まれてきたものなのです。私の講演では、室町文化をよりよく理解していただくために、当時の社会の苛酷な現実の一端をご紹介しようと思います。具体的には、庶民の”出産”にまつわる当時の史料を使って、産褥死（難産による母親の死亡）や間引き（嬰児殺害）の問題について考えてみるつもりです。素材は限られますが、この講演を通じて来場の方々に「長寿大国」「飽食の時代」といわれる現代の日本社会を見つめなおす、なんらかの手がかりでも提供できれば、と思っています。

Ⅱ　ⅰ）飢饉のなかの中世日本—環境史の成果に学ぶ—
　　ⅱ）室町人は何月に死ぬか？
　　ⅲ）古米か？　新米か？
　　ⅳ）死産か？　安産か？
　　ⅴ）男が多いか？　女が多いか？

略　　歴：　１９７１年、東京都生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。専攻は日本中世史。

主要著書：　『室町社会の騒擾と秩序』（吉川弘文館・２００４年）・『喧嘩両成敗の誕生』（講談社選書メチエ・２００６年）

能における生と死

東京大学大学院総合文化研究科教授　松岡心平（まつおかしんぺい）

世阿弥には、「柏崎」「当麻」「姨捨」のような浄土教に取材した秀作の能がいくつかある。この講演では「柏崎」「姨捨」を通して、能における生と死を考えてみたい。

「柏崎」のクライマックスは、女人禁制の善光寺如来堂内陣に入りこんだ女が、亡き

夫の形見の衣裳を身につけて舞う場面である。そこでは、女の亡き夫への恋慕の感情が、生身の阿弥陀仏のそれへと重ねられる。女と浄土の間には距離があり、逆に距離があるところに恋慕の宗教ドラマが発生している。

ところが世阿弥は、「姨捨」を書くことで、この距離の無化を狙った。「姨捨」の老女は、ほぼ浄土と一体化しているのではないか。女が浄土の光そのものの存在と化すことは、より強い死の相のあらわれといえるのではないだろうか。

略　　歴：　１９５４年生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。
専門は、能、世阿弥を中心とする中世芸能。現在、東京大学大学院総合文化研究科教授（表象文化論）。
能の研究上演団体「橋の会」の運営委員をつとめ、現在、財団法人「観世文庫」理事。

主要著書：　『宴の身体ーバサラから世阿弥へー』（岩波現代文庫）、『能ー中世からの響きー』（角川書店）、『中世を創った人びと』（新書館）、『中世芸能を読む』（岩波セミナーブックス）、『世阿弥を語れば』（岩波書店）など。

一　調

観世流シテ方　片山（かたやま）　清司（きよし）

１９６４年京都市生まれ。九世片山九郎右衛門を父に、京舞井上流四世井上八千代を祖母に、五世井上八千代を姉にもつ。父及び故八世観世銕之亜に師事。１９７０年「岩船」で初シテ。父と共に片山定期能楽会を主宰。
１９９７年京都府文化奨励賞。２００３年京都市芸術新人賞、文化庁芸術祭新人賞。重要無形文化財総合指定保持者。（社）京都観世会理事、（財）片山家能楽・京舞保存財団常務理事。

金春流太鼓方　前川（まえかわ）　光長（みつなが）

１９５２年京都市生まれ。祖父前川宗閑及び金春惣右衛門に師事。１９６３年「鷺」にて初舞台、初能。１９８９年京都市芸術新人賞。重要無形文化財総合指定保持者。七曜会（素人）主宰。